

『ジェイン・エア』とフェミニズム  
—— ヴィクトリア朝後半から第二次世界大戦まで ——

杉村 藍

*Jane Eyre and Feminist Criticism:*  
From the Later Victorian Age to World War II

Ai SUGIMURA

I はじめに

Charlotte Brontë (1816-55)が出版した最初の小説 *Jane Eyre* (1847)は、出版と同時に大きな反響を巻き起こし、多くの書評が新聞、雑誌に掲載された。作品に対する興味は批評の数にも反映され、*Jane Eyre* への人々の関心の高さを窺わせる。今日もその人気は変わっていない。特に1960年代後半からは、フェミニズム批評が盛んになったのに伴い、女性作家による女性を主人公とした物語 *Jane Eyre* はさらに批評家の注目を集めるようになった。そのため *Jane Eyre* に関するフェミニズム批評というと1960年代後半以降のものを指す場合が多い。しかし実際には、この作品についてのフェミニズム的解釈や言及はすでに出版当初の批評にその萌芽が見られるのである。<sup>1</sup>ここでは *Jane Eyre* 批評におけるフェミニズム批評の移り変りを時代に沿って跡づけてみたい。今回は Elizabeth Gaskell (1810-65)が執筆した作者 Charlotte の伝記 *The Life of Charlotte Brontë* (1857)が発表された後、すなわちヴィクトリア朝後半期から第二次世界大戦までの *Jane Eyre* 批評を扱う。

II *The Life of Charlotte Brontë* 出版以後

作者 Charlotte の生涯を悲劇的な視点で描いた *The Life of Charlotte Brontë* の出版は、それだけで Charlotte と彼女の作品に対する興味を掻きたてるのに充分であった。*Jane Eyre* は9年ぶりに再版されることになり、1857年第4版が出版された。Brontë 姉妹とその作品への関心が深まっていたことはそのまま批評家の反応に見ることができる。しかしこのころの書評は *Jane Eyre* を単独で取り上げているものではなく、いずれも *The Life of Charlotte Brontë* との関連で、またはその書評の一部で言及されるに留まっている。<sup>2</sup>

しかも、Gaskell の伝記がもたらした *Jane Eyre* fever の再燃は一時的なものでしかなかった。その後、*Jane Eyre* も含め Brontë に関する興味は大きく落ち込んでいった。少なくとも発表された批評を見るかぎり、その数の減少は明らかである。こうした状況のなか、敢えて Gaskell に次いで伝記 *Charlotte Brontë: A Monograph* (1877) を出版した T. Wemyss Reid (1842-1905)は当時の *Jane Eyre* をめぐる批評について次のように述べている。

I have expressed my conviction that the comparative neglect from which "Jane Eyre" and its sister-works now suffer is only temporary. It is true that in some

respects these books are not attractive. Though they are written with a terse vigour which must make them grateful to all whose palates are cloyed by the pretty writing of the present generation, they undoubtedly err on the side of a lack of literary polish. And though the portraits presented to us in their pages are wonderful as works of art, unsurpassed as studies of character, the range of the artist is a limited one, and, as a rule, the subjects chosen are not the most pleasing that could have been conceived. Yet one great and striking merit belongs to this masterly painter of men and women, which is lacking in some who, treading to a certain extent in her [Charlotte's] footsteps, have achieved even a wider and more brilliant reputation.<sup>3</sup>

この引用から、当時 *Jane Eyre* をはじめとする Charlotte の作品が人々に顧みられていなかったことがわかる。Reid は Charlotte が扱う領域に限界があること、主題の選び方が必ずしも適切でないことは認めながらも、彼女の作品の素晴らしさを激賞している。Reid が挙げている欠点が果たして *Jane Eyre* が読まれなくなった理由の適切な分析であったかどうかはわからない。<sup>4</sup> *Quarterly Review* (December 1848) で *Jane Eyre* を痛烈に非難した Elizabeth Rigby (Lady Eastlake, 1809-93) の影響が、ヴィクトリア朝の道徳的価値観に支えられる形でまだ色濃く残っていたこともその原因の一つであろう。しかし少なくとも当時 *Jane Eyre* の研究は非常に低調であり、それどころか文学批評の対象として取り上げられることさえもわずかであった。この時期は *Jane Eyre* 批評にとってまさに「冬の時代」だったのである。

このころの批評のなかで、*Jane Eyre* を女性という観点で捉えているものを挙げるとすれば、Mrs Oliphant (1828-97) が *Blackwood's Edinburgh Magazine* に無記名で発表した記事が代表的なものであろう。

For there can be no doubt that a singular change has passed upon our light literature. . . . The change perhaps began at the time when Jane Eyre made what advanced critics call her "protest" against the conventionalities in which the world clothes itself. We have had many "protests" since that time, but it is to be doubted how far they have been to our advantage.<sup>5</sup>

Mrs Oliphant がここで述べている "protest" against the conventionalities' とは、作中 Jane が女性も男性と同じように社会で活躍の場を求めていること、地位や身分などの因習を超えて自分と雇い主 Rochester が人間として対等であると主張したことなどを指しているであろう。しかし Mrs Oliphant によると、男女平等の思想を先取りした Jane の抗議は、後に才能の乏しい作家たちによってその埋合わせとして 'sensational' な要素だけが乱用されるようになってしまった。彼女は 'It is painful to inquire where it is that all those stories of bigamy and seduction, those *soidisant* revelations of things that lie below the surface of life, come from.'<sup>6</sup> と述べ、*Jane Eyre* で描かれた女性の自己主張の斬新さが 'sensational novels' のルーツとなってしまっていることを嘆いている。

この時期、*Jane Eyre* について書かれた批評的文献が少ないなかで、さらにフェミニズムの要素をもつものを探し出すのは一層難しい。しかし、このころのフェミニズム運動そのものが低調だったというわけではなく、むしろ19世紀後半からイギリスにおける女権拡張運動は本格

化していく。婦人雇用推進協会の発足(1859)、全国婦人参政権協会の設立(1867)など、女性の権利の獲得、保護を目指した社会的な動きが多く見られるようになってくる。<sup>7</sup>そうした女権拡張運動が、明らかにフェミニズムの要素をもつ *Jane Eyre* 研究と結びつかなかったのはなぜであろうか。

当時は、フェミニズム運動が本格化しはじめたばかりの揺籃期にあり、これを他の分野の活動と関連させるだけの余裕がなかったためであろう。運動そのものは単独で進展していったわけではなく、同時代のさまざまな領域と相互に刺激を与え合っていた。例えば、日本ブロンテ協会の中岡洋氏は、当時の服装の流行の変化にもフェミニズム運動との関連が見出されると指摘している。<sup>8</sup>この服飾とフェミニズム運動の相互影響関係が次第に深まっていったのに対して、文学批評とフェミニズム運動との関係はさらに大幅に遅れて顕在化するようになった。そのためこの運動が本格化する以前に出版され、文学研究そのものにおいても顧みられることが少なくなっていた *Jane Eyre* を、フェミニズムの視点で読むという発想は当時の批評家にはなかったはずである。

このように、ヴィクトリア朝の後半期においては、社会的にはフェミニズム運動は本格的になりつつあったが、その運動はまだ混沌としており文学批評にまで応用することができない状態であった。そのため、「冬の時代」を迎えていた *Jane Eyre* 研究は、批評の数そのものが少なかったこともあり、そのなかで特にフェミニズム的要素を明確に指摘することが難しい時期であったといえるのである。

### Ⅲ 世紀末 ～ 1920年代

世紀末に入りヴィクトリア朝も終盤になると、再び *Jane Eyre* は文学研究の対象として注目されるようになった。しかしこの時期はまだ Charlotte や *Jane Eyre* が単独で取り上げられることはなく、ヴィクトリア朝時代の一家作家、一作品として同時代の他の作家や作品とともに論じられることが多かった。というのも、世紀末から20世紀初めにかけて、ヴィクトリア朝初期やヴィクトリア朝期全体の文学を振り返ろうとする動きがあったからである。このころ出版された文学批評書には *The Victorian Age of English Literature* (Mrs. Oliphant, F. R. Oliphant, 1892), *Studies in Early Victorian Literature* (Frederick Harrison, 1895), *The Literature of the Victorian Era* (Hugh Walker, 1910) などがある。ヴィクトリア朝の文学を概観する際、一時的に顧みられることが少なくなっていたとはいえ、やはり Charlotte Brontë や *Jane Eyre* は無視しがたい大きな存在であった。*Jane Eyre* は時間の試練を耐え抜き、永遠の価値を有する文学作品としての地位を確立していたのである。<sup>9</sup>

しかし、この時期に発表された *Jane Eyre* 論には小説の出版当初の書評と似通ったものが多く、際立って新しい展開は見られない。Reid が述べていたように、ヴィクトリア朝期後半には一時 *Jane Eyre* の研究が実質的に中断していたこともあり、改めて批評を再開するに当たって、このころの批評家たちはまず作品が出版された当時の書評にその手がかりを求めたのであろう。実際、*Jane Eyre* 出版当初の人々の反応に触れたり、Rigby の *Quarterly Review* に言及している批評が多く見られた。<sup>10</sup>これは、一時的であったとはいえ *Jane Eyre* 離れがかなり深刻であったことを間接的に証明している。*Jane Eyre* 研究は、この時期事実上の再スタートを切ったといえる。

出版当時の書評のなかで、後のフェミニズムにつながる言及としてもっとも多かったのは、主人公 Jane の人物創造がヒロインとしてのステレオタイプに当てはまらないというもので

あった。この指摘は19世紀末から20世紀にかけての *Jane Eyre* 批評のなかでも再び繰り返されている。

It is significant to notice that Charlotte Bronte, following consciously or unconsciously the great trend of her genius, was the first to take away from the heroine not only the artificial gold and diamonds of wealth and fashion, but even the natural gold and diamonds of physical beauty and grace.<sup>11</sup>

ここでは Charlotte が、容姿の美や富という、従来のヒロインには当然であった要素を取り除いた最初の作家であると高く評価されている。彼女は新しいヒロインの創造、すなわち伝統的な女性のステレオタイプ打破によって図らずもフェミニズムの先駆となったのである。

先に述べたように、この点については小説の出版当初すでに複数の書評で指摘されていた。けれども、性別がわかっていなかった作者 'Currer Bell' が女性かもしれないという推測がなされ、特に Rigby による *Jane Eyre* 批判が発表されてからは、それまで新しいヒロインとしてもはやされていた Jane は、一転して下品で野蛮な女性という評価を受けるようになってしまった。Jane の斬新な人物創造は、男性作家には許されても女性作家には認められないものだったのである。こうした状況には、当時の厳格な女性観、徹底した男女の役割分担の思想が反映されている。

だがこれに対し、この時期にはヒロインを下品である、慎ましくない、ということで非難する批評家はいなかった。Rigby の意見はヴィクトリア朝の厳しい道徳律を支柱としていたため、その道徳律が健在である間は強い影響力をもち得た。しかし、ヴィクトリア朝の価値観が揺らぎ始めてからは、まるでそれまでの反動のように、彼女の批評は 'outspoken, and unsympathetic, criticism'<sup>12</sup> として、むしろ否定されるようになった。批評家たちの Rigby を拒絶する語気の強さは、逆説的に彼女の主張とそれを支えるヴィクトリア朝の道徳観がまだ力を揮いかねない状況にあったことを感じさせる。だが少なくとも、女性作家が創造した新しいヒロイン Jane は1840年代のような非難を浴びることはもうなくなっていた。こうした現象は、フェミニズム運動の活発化も絡み、ヴィクトリア朝の女性観が崩れ去った、あるいは崩れ去ろうとしていたことを明らかにしている。

また、出版当時とこのころの *Jane Eyre* 批評とで決定的に異なる点をもう一つ挙げるとすれば、それは作者が誰であるかがわかっていたことであろう。1847年 *Jane Eyre* は 'Currer Bell' という中性的なペン・ネームで発表されたために作者の身元がまったくわからなかったが、この時期の批評家たちは Mrs Gaskell の伝記 *The Life of Charlotte Brontë* によって 'Currer Bell' の本名だけでなくその生涯までも詳細に知っていた。Charlotte の生涯そのものの悲劇的な様相と、それを描いた Mrs Gaskell のドラマティックな筆致から、この伝記は Bronte 研究において非常に重要な位置を占めるようになっていた。当時の文学者 Hugh Walker の "The Brontes belong to that class of writers whom it is impossible to understand except through the medium of biography"<sup>13</sup> という言葉は、こうした状況をよく示しているであろう。

けれども、このように作者 Charlotte Bronte の存在が作品研究と密接に関わってくると、作者が女性であったという認識を土台としてそれまでにはない意見が見られるようになった。批評家たちが Rochester の人物創造に「女性らしさ」を読み取ったのである。先に作品研究と伝記とのつながりを指摘した Walker は、その指摘通り作者 'Currer Bell' が女性であることを強

く意識し、Rochester をはじめとする男性登場人物について次のように述べている。

Charlotte Brontë's pictures of men show the same sort of defects as women find in the portraits of women drawn by men. Rochester could never have been the hero in any novel written by a man, and very few of her masculine characters carry the conviction of truth.<sup>14</sup>

具体的な根拠を挙げているわけではないが、Walker は Rochester が「女性作家の描いた男性」であり、他の男性登場人物に関しても真実が感じられないとしている。<sup>15</sup>

先に述べたように、*Quarterly Review* をはじめとして *Jane Eyre* が出版されたころの書評では、女性がこのような野蛮な小説、Jane のような大胆なヒロインを書くはずはないと、作者が女性である可能性が否定されていた。*Jane Eyre* は発表当時、作者が男性である場合にのみ認められる作品であったといえよう。しかし、その作者が女性であることが明らかになると、今度は女性の作品であるという認識のもとに *Jane Eyre* は新たな問題点を指摘されるようになったのである。

Walker は先の引用に続く部分で次のような意見を述べている。

On the other hand, it would scarcely have been possible for anyone but a woman — unless a new Shakespeare had appeared — to draw such a character as Jane Eyre, or even Lucy Snowe. For this reason alone, if there had been no other, there was room for the growing class of female writers; and for this reason those who, like Charlotte Brontë, have done their work faithfully and well have a claim upon the gratitude of their country. Those very differences of character, temperament and endowment, which have been so often advanced as reasons why women should confine themselves to domestic life, are so many reasons the more why some women should be poets and novelists. As “it takes all sorts of people to make a world,” so it needs all sorts of gifts to make a round and harmonious literature. The fact that domestic work must always be the primary and the most essential work of women proves nothing. It is equally true that agriculture is the primary and most essential work of men; but it does not follow that every man must be a farmer.<sup>16</sup>

Walker は女性作家に適した活動の領域を割り当てることで彼女たちの存在意義を認めようとしている。けれどもここでは描く立場の作家の側にも、そして描かれる登場人物の側にも、どちらにも男性、女性といった性の違いが強く意識されている。(新しい) Shakespeare を例外として挙げてはいるが、Walker の考えは突きつめれば本当の女は女性作家にしか描けないし、同じように男は男性作家にしか描けないということになる。彼のこうした意見の背景には、例えば引用の後半で女性＝家庭、男性＝農業と容易に連想を示すところにも表れているように、男女の役割分担、あるべき姿の違いといった性差が根強く歴然と存在していたことがわかる。こうしたなかで作者が男性であるのか女性であるのかといった作者の性別の問題は、出版当初と異なったかたちであるとはいえ、この時期の *Jane Eyre* 批評においても切り離せないものであったことが窺える。

#### IV 1930年代 ～ 第二次世界大戦

*Jane Eyre* 批評では、しばらくヒロイン Jane の独創的な人物創造を指摘するという、初期の書評と同様の作品批評が続いた。しかし、やがて明確にフェミニズムの視点で作品を捉えた新しい *Jane Eyre* 論が登場する。

It was *Jane Eyre* that for the first time established one of the great Rights of Women, the Right of Passionate Love, . . . Charlotte Bronte almost made passion respectable she certainly made it respected. The freedom of women, as reflected in fiction has shown some revealing changes, none more revealing than those seen in *Jane Eyre*.<sup>17</sup>

ここでは女性の権利(the great Rights of Women)、女性の自由(The freedom of women)を確立した最初の小説として *Jane Eyre* が称賛されている。批評家は女性の権利と自由という、後のフェミニズムに直接つながっていく問題意識を明確に示して *Jane Eyre* を読んでいる。これを執筆したのはイギリスの小説家 Norman Collins (1907-)である。わたしの見るかぎり、*Jane Eyre* 批評の歴史のなかで彼のこの批評がもっとも早い本格的フェミニズム批評である。出版当初からの批評のなかに見られたフェミニズム的指摘が無意識のものであったのに対し、これ以後はフェミニズムという思想をはっきりと意識した批評が登場する。

では Collins は、作品のなかでこうした女性の権利、自立がどのように描かれていると考えているのであろうか。

It was, I believe, no sudden overflow of charity that made Charlotte give Jane Eyre a surprise legacy of £20,000. It was not so much a sentimental liking for wives as a most unsentimental dislike of husbands that prompted her to do this thing. That cry of Jane's, "I am an independent woman now," has set up a whole orchestra of echoes

Charlotte Bronte was not, of course, the first to draw a heroine happy and proud of having a dowry as large as her husband's fortune. She was merely the first to draw a heroine conscious of the significance of it. She established the new line of wives who were partners and not wealthy dependents. . . , Charlotte Bronte was quietly and humorously announcing a piece of feminism that even to-day is startling in its implications.<sup>18</sup>

Collins は、経済的な自立こそが女性の自立を可能にするものと考えた。そのため彼は、作品の第33章で貧しい孤児にすぎなかった Jane がそれまで一度も会ったことのない叔父の財産を相続するというエピソードを重要視している。この部分は展開が唐突であるため、プロットがメロドラマ的であり都合よくできすぎているという非難を繰り返し受けてきた。しかし Collins は、この遺産相続に単なるセンチメンタリズムではなく、女性の独立を可能にするための条件を見出すという積極的な読み方をしている。彼は経済力の重要性、意義を把握できるヒロインを創造した最初の作家として、Charlotte Bronte の独創性を非常に高く評価した。そして彼女

が、当時でさえもまれであったフェミニズムの思想をすでに19世紀に備えていたことに驚きを表わしている。ここで彼は直接 'feminism' という語を用いている。

Collins が指摘した通り、Charlotte が女性の経済的自立の必要性を痛切に感じていたことは確かである。彼女は年老いた父の経済的負担を少しでも軽減するため、ガヴァネスや学校教師を経験し、さらには自宅で私塾を開設するために留学までして準備をし、その挙句に失敗していた。彼女が女性も男性と同じように自立し、社会に活動の場を得るべきだと考えていたことは、作品の第12章に描かれる Jane の独白にも明らかに示されている。

Women are supposed to be very calm generally: but women feel just as men feel; they need exercise for their faculties, and a field for their efforts as much as their brothers do; they suffer from too rigid a restraint, too absolute a stagnation, precisely as men would suffer; and it is narrow-minded in their more privileged fellow-creatures to say that they ought to confine themselves to making puddings and knitting stockings, to playing on the piano and embroidering bags. It is thoughtless to condemn them, or laugh at them, if they seek to do more or learn more than custom has pronounced necessary for their sex.<sup>19</sup>

しかしながら、女性の自立という問題を、経済的な側面から精神的な側面へと結びつけて明確に論じたのは、Collins が最初ではなかった。Collins も言及している Virginia Woolf (1882-1941) が、彼に先立ち、自立した財産が自立した精神につながるという思想を評論 *A Room of One's Own* (1929) のなかで明らかにしていたのである。この評論は現代イギリスにおけるフェミニズム批評の原点に位置づけられている。<sup>20</sup> Woolf によると、評論のタイトルになっている「自分自身の部屋」とは自ら考える力の象徴であり、これと瞑想する力を意味する年収「500ポンド」とが女性作家には必要であるという。<sup>21</sup> Woolf のこうした主張は、一見、あまりにも物質的すぎるといふ印象を与える。この点は彼女自身も認識しており、そのうえで、物質的、経済的条件がいかに精神的独立を保つのに重要であるかを主張するために、Cambridge で英文学教授を務めた批評家 Sir Arthur Quiller-Couch (1863-1944) の著書 (*[On] the Art of Writing*, 1916) から次のような引用をしている。

What are the great poetical names of the last hundred years or so? Coleridge, Wordsworth, Byron, Shelley, Landor, Keats, Tennyson, Browning, Arnold, Morris, Rossetti, Swinburne — we may stop there. Of these, all but Keats, Browning, Rossetti were University men; and these three, Keats, who died young, cut off in his prime, was the only one not fairly well-to-do. It may seem a brutal thing to say, and it is a sad thing to say but, as a matter of hard fact, the theory that poetical genius bloweth where it listeth, and equally in poor and rich, holds little truth. As a matter of hard fact, nine out of those twelve were University men: which means that somehow or other they procured the means to get the best education England can give. As a matter of hard fact, of the remaining three you know that Browning was well-to-do, and I challenge you that, if he had not been well-to-do, he would no more have attained to write *Saul* or *The Ring and the Book* than Ruskin would have

attained to writing *Modern Painters* if his father had not dealt prosperously in business Rossetti had a small private income, and, moreover, he painted . . . It is certain that, by some fault in our commonwealth, the poor poet has not in these days, nor has had for two hundred years, a dog's chance.<sup>22</sup>

Quiller-Couch はここで詩人とそれを支える経済的条件との分かちがたい関係を指摘している。彼が名を挙げているのは男性ばかりである。彼らが詩人となるために厳しい経済的制限が存在したのだとしたら、より不安定な立場にあったであろう女性たちが詩人、あるいは作家となることはさらに制限されてしまったことであろう。Woolf はこれを引用することにより、'Intellectual freedom depends upon material things'<sup>23</sup> という、唯物論に基づいた彼女の主張を改めて強調している。

Woolf の意見は徹底した現実観察から生まれており、確かに正鵠を得たところがある。だが Collins も指摘しているとおり、自由も隠遁所もない女性たちがこれまでも実際に素晴らしい業績を残してきたし、<sup>24</sup> 少なくとも Charlotte Bronte が *Jane Eyre* を執筆したのは必ずしも経済的に恵まれた状況においてではなかった。Woolf の主張には、第一次世界大戦(1914-18)や世界恐慌(1929)によって、世界的に経済状況が不安定であったことが影響していたのであろうか。「意識の流れ」に重点をおき人間の心理を描いた彼女がこれほどまでに経済的な自立の重要性を唱えていることには驚きを感じる。しかし、今日のような物質的豊かさを享受できる時代には理解しがたいかもしれないが、当時の人々にとって経済的、物質的問題は Woolf のような知性をもってしても実に重大な問題だったにちがいない。少なくとも、*Jane Eyre* をフェミニズムの視点で捉えたこの時期の批評家が注目したのは、経済的自立と精神的自立との関連であった。このようにして *Jane Eyre* は、女性の物心両面における自立を指摘した最初の小説として、本格的なフェミニズム批評の対象となったのである。

Collins 以後、1930年代、40年代には、*Jane Eyre* をさらに積極的にフェミニズム思想と結びつける批評が登場してくる。<sup>25</sup> 1930年代以降、このように明確なフェミニズム批評の動きが見られるようになった背景には、このころの女性解放運動の気運が大きく関わっていたと思われる。第一次大戦が女性の社会進出を急速に推し進め、それに伴って女子服の近代化が本格的に始まったと同じように、文学批評におけるフェミニズムもまた、社会の動向と密接に関わりながら進展していった。そこで社会に目を向けてみると、実際に女性の権利を擁護しようとする運動が盛んになっている。特にアメリカでは、女性のノーベル賞受賞者が現われたり、初の女性閣僚が誕生するなどして、女性の社会進出が目覚ましかった。<sup>26</sup>

では、このころのフェミニズム批評のなかから、Elizabeth Bowen (1899-1973) の *Jane Eyre* 論を見てみよう。

Charlotte Bronte's *Jane Eyre*, on the other hand, gains force by being woman from beginning to end . . . Jane wants much more than love, she wants human fullness of life — the book voiced, for the first time, woman's demand for this. Read the scene where, alone on the roof of the country house, Jane looks out over the country and cries for movement, achievement, adventure — feeling the masculine part of her spirit stir. Might this be called the first feminist novel?<sup>27</sup>



引用を見るかぎり、Bowen はすでに挙げた Hugh Walker と同じく男女を人間という視点から等しいものと捉えるよりは、両者の性による違い、性差があるという前提が意識の根底にあった。先の *Jane Eyre* 第12章の、Jane が男性と同じように社会に活躍の場を求める場面に関しても、Bowen は 'the masculine part of her spirit' と述べて、Jane の主張が彼女の人間としての渴望ではなく彼女の男性的な性質によって生まれる願望と捉えている。

けれども、Bowen の *Jane Eyre* 論のなかで特に注目しなければならないのは、*Jane Eyre* を 'the first feminist novel' と定義している点である。彼女はこの小説をフェミニズムの視点で読むばかりでなく、最初のフェミニズム小説として文学史的な位置づけも行なっているのである。ここからは、このころまでに文学批評のなかでフェミニズムが一つの分野、視点としてその地位を確立しつつあったことも窺える。

この時期に *Jane Eyre* をフェミニズムの視点で読んだ人々が指摘したのは、主に女性の経済的自立の必要性を描いている点、女性の恋愛や情熱を明確に表現している点の二点である。これらは作者 Charlotte Brontë が自身の体験から学び、またそうありたいと願っていたものである。彼女が *Jane Eyre* で描き出した理想は、このころの批評家たちによって高く評価された。言い換えれば、批評家たちは Charlotte とほぼ同じ問題意識をもつようになっていたために、作品の主張の素晴らしさを十分に堪能することができたのだといえよう。そうだとすれば、1847年に Charlotte が発表した *Jane Eyre* のなかに盛り込まれた彼女の思想は、その後100年近い年月を経たこの時期に至って初めて正当に評価されたということになる。Charlotte がフェミニズムという言葉すら意識せずに作品のなかに描いた男女平等の理想世界は、20世紀も中葉を迎えようとするこの時期、ようやくその意味が理解されるようになった。すなわち、彼女はフェミニズム思想に関して一世紀近くも時代に先んじていたことになるのである。

このころの批評家たちは、*Jane Eyre* をフェミニズムの理想的手本とみなした。Charlotte が描いたことを字義どおりに受けとめ、後の1970年代以降のフェミニストたちが指摘するようになる Jane の弱さ、矛盾を読み取る者はいなかった。人々は Charlotte が意識し描こうとしたとおりにフェミニスト Jane の姿を認めた。彼らの読み方は表層的なものであったかもしれないけれども、この時期の *Jane Eyre* はフェミニズム小説として作品の意図が全面的に受け入れられ、作者と批評家とが対立することもなかった。これは *Jane Eyre* のフェミニズム批評の歴史のなかで、もっとも幸福な時代であったといえるのかもしれない。

## 注

- <sup>1</sup> *Jane Eyre* 出版当時の批評に見られるフェミニズムの要素については拙論「*Jane Eyre* の初期批評とフェミニズム」(『流通経済大学論集』Vol. 30, No. 3, 1996.1, pp.30-40)を参照のこと。
- <sup>2</sup> *The Life of Charlotte Brontë* が出版された当時の批評のなかで *Jane Eyre* への言及を含むものを見ても、批評家たちが注意を向けていたのは主に作家自身の生涯であり、作品への関心はその一部でしかなかったことがそのタイトルからわかる。伝記が出版された1857年の書評のうち *Jane Eyre* 批評を含むものから、一部をここに挙げておく。

Anon.	"Charlotte Brontë." <i>Putnam's Magazine</i> 9 (June)
Dallas, Eneas Sweetland.	"Charlotte Brontë" <i>Edinburgh Magazine</i> 82 (July)
Martin, H. Marie.	"Currer Bell (Charlotte Brontë)." <i>Constitutionnel</i> (Paris). (8th June)
Montégut, Émile.	"Miss Brontë: Sa Vie et Ses Oeuvres." <i>Revue des Deux Mondes</i>

8th ser 10.

Skelton, John. "Charlotte Bronte." *Fraser's Magazine* 55 (May).

[Sweat, Margaret J.] "Charlotte Bronte and the Bronte Novels" *North American Review* 85 (October).

<sup>3</sup> T Wemyss Reid, *Charlotte Brontë. A Monograph.* (Macmillan and Co., 1877), pp. 233-4

<sup>4</sup> Miriam Allott も *The Brontës: The Critical Heritage* のなかで、このころ Bronte に関する出版物が少なかったことを指摘している。しかしその理由として彼女は、Mrs Oliphant の言葉を引用して、George Eliot (1819-80) のような新しい作家たちが登場したことを挙げている。(Miriam Allott ed., *The Brontës: The Critical Heritage* London and Boston Routledge & Kegan Paul, 1974, "Introduction." pp 41-2)

<sup>5</sup> [Margaret Oliphant], "Novels." *Blackwood's Edinburgh Magazine*. No DCXXIII September 1867 Vol CII p 258

<sup>6</sup> *Ibid*, p. 258.

<sup>7</sup> 19世紀後半から20世紀にかけて、イギリスでの主なフェミニズム運動には次のようなものがあった。

1854年 Nightingale 従軍看護婦としてクリミア戦争へ

1856年 Mrs Browning, *Aurora Leigh* 出版

1857年 離婚・婚姻訴訟法成立、B L Smith らの既婚婦人財産法案廃案。社会科学振興協会設立、フェミニスト育つ

1858年 フェミニスト機関誌 *English Woman's Journal* 創刊

1859年 婦人雇用推進協会発足。女性の医学教育推進委員会設立

1860年 Nightingale 看護婦訓練学校創立

1862年 中流婦人移民協会設立

1866年 婦人参政権の請願、議会に提出

1867年 全国婦人参政権協会設立

1869年 売春禁止運動。E. Davies 女子高等教育のため Girton College の前身を開設

1874年 E. Paterson 婦人保護共済同盟設立

1878年 ロンドン大学女性入学許可

1882年 既婚女性財産法成立

1897年 M G. Fawcett ら婦選協会国民連合設立

なお、この年表は、植松みどり、実吉典子「英米女性文学年表」(『英語青年』1981年8月号、pp 340-1) を参考にして制作したものである。

<sup>8</sup> 中岡洋氏は、19世紀後半から20世紀にかけて見られるブルーマーズボン、クリノリン、パッスルといった女性の衣服の流行の変化に、服飾とフェミニズム運動との関連を見出している。

ブルーマーズボン(Bloomers)はアメリカの服飾改良家 Amelia Bloomer (1818-94) にちなんで名づけられたもので、くるぶしのすぐ上でギャザーになっただぶだぶのズボンのことである。[図1] Bloomer は婦人のための改良服を発表し、女性の社会的地位向上のシンボルとした。改良のポイントはコルセットをはずし、女性も男性と同じくズボンをはこうというものであった。これは発表後一部に賛成者も現われたが、大衆はこれを珍奇なものともみなし受け入れられることはなかった。

クリノリン(crinoline)はスカートを釣り鐘状に広げるためのペティコートで、1856年から70年頃にかけて流行した。[図2] 生活のために働く下層階級は別として、当時女性が働くことはまだ認められていなかったため、女性の衣服の流行は機能美を追求する必要はなかった。むしろそうした考えは不道徳とみなされていたらしい。しかし、1860年頃際限なく大きくなったクリノリンはついに日常生活にもかなりの不便を来すようになった。これに辟易した当時の女性の「たった

1日でもいいから、男も女の衣服を着てみるべきです。そうすれば、女性の衣装ももっと違っていただいしょうから」という言葉も残されている。注目したいのは、女性たちが衣服の流行の責任の一端を男性に転嫁している点である。衣服は、装う女性たちではなく、多分に見る男性たちの目を強く意識して着用されたためである。しかし、そうした衣服の流行はほかならぬ女性たち自身によっても進んで支持されていたことを忘れてはならない。コルセットをはじめとして、衣服によって強いられる女性の肢体の不自然な矯正は、社会によって彼女たちに課せられた厳しい因習や規律と同じ構造をなしている。衣服の場合と同じように、社会による女性への締めつけにおいて果たして女性たちがひたすら被害者であったのか、消極的なかたちではあれそれを女性自身が支えるということはなかったのか、この点は考えてみる必要があるであろう。

バッスル(bustle, 腰当て)はクリノリンが使われなくなってから、スカートの後ろを広げるために用いられた腰当てで、1885年に大流行し、89年頃姿を消した。[図3]クリノリンがスカート全体を強調していたのに対し、これはその一部だけを強調するものである。

そして20世紀に入ると、女性のさまざまなスポーツへの参加や、第一次世界大戦で女性の社会参加が急増したことから、女性服が本格的な合理的形態をもつようになった。スカートの丈はだんだん短くなり、コルセットもほとんど廃止となって、膝、ウエストが解放された。[図4]は1916年のスタイルで、コルセットによる極端なウエストの締めつけもなくスカートは床上り20センチ位に短縮されている。戦時中に流行したスカートなので‘war crinoline’と呼ばれたが、クリノリンといっても名前だけで、人工的なペティコートを用いていたわけではない。少なくともこの時代以前の女性服と比べると、明らかに一歩近代化されたものとなっている。

不自然に体を締めつける衣服からより自然で自由な動きのとれる衣服へと移り変わっていく様子には、確かに身体と同時に精神も締めつけを解かれていく女性たちの姿が窺えよう。

(女性ファッションの移り変わり並びにその用語の説明については次のものを参考にした。千村典生著『図解ファッションの歴史』鎌倉書房、1969年、J・アンダーソン・ブラック、マジ・ガーランド著、山内沙織訳『ファッションの歴史』(下)PARCO出版、1978年、木嶋啓造著『イラスト西洋服装事典』有峰書店、昭和53年)



[図1] 1851年 Bloomers



[図2] 1855年 Crinoline



[図3] 1885年 Bustle



[図4] 1916年 War Crinoline

<sup>9</sup> *Jane Eyre* が研究対象としてさまざまな文学書で取り上げられていることが何よりもそれを裏づけているが、次のように述べて、このころ Charlotte がヴィクトリア朝作家の一人としてその名声を確立したと明言する批評家がいたことも付け加えておく。

'From her [Charlotte's] own day to ours her fame has been growing, and her place as one of the greatest of the Victorian novelists is now assured' (Amy Cruse, "*Jane Eyre*." In *English Literature through the Ages*. London George G Harrap & Company Ltd, 1919, p 501)

<sup>10</sup> Frederic Harrison, *Studies in Early Victorian Literature* (1895), Ernest Dimnet, *Les Sœurs Brontë* (1910), R. Brimley Johnson, *The Women Novelists* (1918), A Clutton-Brock, *Essays on Books* (1920)など。

<sup>11</sup> G K Chesterton, "Charlotte Brontë" In *Twelve Types: A Book of Essays*. (London Arthur L Humphreys, 1902), pp. 4-5.

<sup>12</sup> B Brimley Johnson, "A Lonely Soul. Charlotte Brontë. 1816-1855." In *The Women Novelists*. (London and Glasgow Collins' Clear-Type Press, 1918), p. 175.

<sup>13</sup> Hugh Walker, *The Literature of the Victorian Era*. (Cambridge University Press, 1910), p. 710.

<sup>14</sup> *Ibid.*, p 722

<sup>15</sup> Leslie Stephen (1832-1904) や Mrs Oliphant, F R. Oliphant も同様の指摘をしている。Leslie Stephen は次のように述べて、Rochester が作者の声を伝える分身のようなものであり、また同時に女性の憧れる男性の姿を表わしたものだとしている。

Among the characters who are more or less mouthpieces of her [Charlotte's] peculiar sentiment we may reckon not only Lucy Snowe and Jane Eyre, but, to some extent, Shirley, and even more decidedly, Rochester .

.. he [Rochester] does not appear to me to be a real character at all, except as a reflection of a certain side of his creator. He is in reality the personification of a true woman's longing (may one say it now?) for a strong master (Leslie Stephen, *Cornhill Magazine*. December 1877 Repr. Miriam Allott ed. *op.cit.*, p 418)

一方 Mrs. Oliphant と F. R. Oliphant は、Rochester を ‘a woman’s hero’ と呼び、女性の憧れと想像力の領域に適したヒーローとして he [Rochester] introduced a complete revolution into that large part of the realm of fiction in which the feminine imagination is supreme’ と彼の人物創造の革命的な要素を指摘している。彼らは Rochester の意義を高く評価しているわけであるが、フェミニズムの視点で考えると、これは作者が女性であるという性差を強く意識した意見ということになる。(Mrs. Oliphant and F. R. Oliphant, B. A., *The Victorian Age of English Literature*. London: Percival and Co., vol. I, pp. 321-2)

16 Walker, *op.cit.*, p. 722-3.

17 Norman Collins, “The Independent Brontes.” In *The Facts of Fiction*. (London: Victor Gollancz Ltd., 1932), p. 180.

18 *Ibid.*, pp. 181-2.

19 Charlotte Bronte, *Jane Eyre*. Ed. by Jane Jack and Margaret Smith (Oxford at the Clarendon Press, 1975), pp. 132-3.

20 Jewel Spears Brooker, “Feminism and Modernism — Gilbert and Gubar’s Gender-Based Cold War —.” 『英語青年』1993年12月号、p. 430 Woolf の *A Room of One’s Own* が出版された1929年が現代イギリスのフェミニズム批評の始まりだとすれば、その3年後に発表された Collins の著書は、このフェミニズムの動きを敏感に感じ取った素早い反応であったといえる。

21 Virginia Woolf, *A Room of One’s Own*. (Penguin Books, 1945), p. 105.

22 *Ibid.*, pp. 105-6.

23 *Ibid.*, p. 106.

24 Collins, *op.cit.*, p. 182

25 次に引用する Elizabeth Bowen のほかには、*The School of Femininity* (1936) を著した Margaret Lawrence が挙げられるであろう。彼女は Charlotte の最初の小説 *The Professor* (1857, 死後出版) についても ‘Its only point, so far as the feminist movement was concerned, is that it is the first appearance, so far as there is record, of the woman who insists on paying her own way after marriage’ (p. 69) と述べ、フェミニズム運動を意識して作品を読んでいたことを窺わせる。同著から彼女が Charlotte の小説について述べている部分を紹介する。

She [Charlotte] drove it home that women had feeling and passionality. She glorified feeling in women. Her characters were all subsidiary to that one main idea. She hated the romantic nonsense that men wrote about women . . . .

What she was really saying, though it is not clear that she knew it consciously, was that women needed a wider intellectual arena in order to find a more satisfying erotic life. They had to have a chance to explore. Love was far more important to them than to men; and yet they were ordained by nature simply to respond to them. (pp. 86-7)

彼女の ‘erotic life’ についての言及は、1960年代後半以降盛んになる S. Freud の心理学を援用したフェミニズム批評を予感させるが、その他の部分では、Bowen と同じく男女の性差を当然の前提としている。Lawrence の批評はフェミニズムという時代の新しい思想に則りながらも、一世代前の価値観もまだそのまま継承するというかたちを呈している。(Margaret Lawrence, “The Bronte Sisters ‘Who Wrestled with Romance.’” In *The School of Femininity: A Book For and About Women As They Are Interpreted Through Feminine Writers of Yesterday and Today*. New York: Kennikat Press, Inc., 1936)

26 Jane Addams (1860-1935) は第一次世界大戦後の平和維持活動を認められ、1931年にノーベル平和賞を受賞した。また、Frances Perkins (1880-1965) は1933年に労働長官に就任、初の女性官僚となる。彼女はアメリカ社会における女性の地位向上にも努めた。

26 Elizabeth Bowen, *English Novelists*. (William Collins of London, 1942), pp. 34-5.